

火屋勤行（ひやごんぎょう）

火葬場にて茶毘にふす前に勤めます。会場によっては葬儀式に引き続き、その場所で勤める場合があります。

①重誓偈（じゅうせいげ）：仏説無量寿經に説かれている法蔵菩薩・四十八願を要約した、五言 44 句の短い偈文です。

②会葬者焼香

*火葬のあとは収骨し、お骨の一つをお寺に納骨していただきます。この間、ご遺族の方には会場やお寺でお疲れ出ませんようお過ごし下さい。

《参考》

お焼香（合掌礼拝）について

浄土真宗本願寺派での焼香は下記の通り（立つてする場合。会葬者は、それぞれのご宗旨における作法に従います）。

- ・左手に念珠を持ち、焼香卓の手前に来て本尊に一礼します。
- ・二三步進んで、お香を右手指でひとつまみし、そのまま1回のみ香炉へ焚べます。額に押し頂くことはしません。
- ・念珠を両手にかけて（親指と人差し指の間）胸の前で合掌し、「なんまだぶ」とお念仏を称えながら礼拝し、おもむろに直ります。
- ・二三步下がって一礼し、自席に戻ります

注）導師に合掌する必要はありません（一礼のみでOK）。

法名について

浄土真宗には戒律がないので、戒名とは言わず「法名」と言います。本来は生きていた間に帰敬式を受けて授かるもので、仏弟子となった名告りです。門主以下僧俗誰もが「釋○○」と2文字であり、釋はお釈迦様の仲間となったという意味です。女性は慣例的に「尼」を付けることもあります。

以上、ご不明な点はお尋ねください。作成：丹生組・報恩寺 林 暁 H29 改

ご参拝の皆様へ

浄土真宗（本願寺派）の通夜・葬儀式 についての簡単な解説



恩愛はなはだちがたく
生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ
罪障を滅し度脱せし

娑婆永劫の苦をすてて
浄土無為を期すること
本師釈迦のちからなり
長時に慈恩を報ずべし

「高僧和讃」／親鸞聖人

浄土真宗は親鸞聖人（1173～1262）を開祖とし、主要經典は「仏説無量寿経」「仏説観無量寿経」「仏説阿弥陀経」の浄土三部経、聖人の著作である「顕浄土真実教行証文類」など。ご本尊は阿弥陀如来（または六字名号＝南無阿弥陀仏）で、その世界を西方極楽浄土と言います。

浄土真宗の葬儀は死者への供養でなく、阿弥陀仏への報恩の行という意味での勤行であり、故人の生前の徳を偲び、往生を遂げて仏になられたとして心から礼を尽くします。よって死者の解脱をはかる引導作法や、追善回向の作法は行いません。念仏者はすでに往生が決まっているので、遺体の上に刃物を置く習慣や、死装束、葬儀の後の「清め塩」なども用いないのが特徴です。

また、かつては自宅にて出棺勤行をし、火葬場や埋葬場所に移して葬場勤行を行っていましたが、現在は多く齋場で葬儀を行うため、齋場にて出棺勤行と葬場勤行、場合によっては引き続き火屋勤行を勤め、火葬場に向かいます。近年の小規模葬においても儀式の中身自体は変わりません。肝要はじっくりお吊いの時間を大事にする事。なお、宗教儀礼であるので告別式（お別れの会）とは言いません。以下に、流れの概略を記します（地域や寺院によっては次第が異なることがあります）。

通夜

ご本尊の前に棺を安置して行ないます。本来は、夜通し故人の側に寄り添い、読経やお吊いをして最後の夜を過ごします。

①正信念仏偈（しょうしんねんぶつげ）：親鸞聖人著作「教行信証」の中の七言 120 句の偈文と和讃六首。阿弥陀如来のお救いである他力の働きや、念仏をインド中国日本に伝えてくださった七高僧が讃えられています。真宗各派、ご門徒として最もよく使われる勤行です。

②法話

③御文章（ごぶんしょう）：室町時代、八代目・蓮如上人が書かれたお手紙の中から拝読致します。真宗のみ教えを味わいましょう。

帰敬式（ききょうしき） / おかみそり

「仏」「法」「僧」の三宝に帰依し、仏教徒として新たな人生を歩むことを誓うもの。葬儀に先立って導師が剃髪動作とともに「流転三界中 恩愛不能断 棄恩入無為 真実報恩者 南無帰依仏・南無帰依法・南無帰依僧（三帰依文）」と唱えて執り行います。生前に本山・西本願寺または菩提寺にて受式された方は行いません。

出棺勤行

①帰三宝偈（きさんぽうげ）：中国の善導大師作「観経疏」から。すべて人々に、三宝に帰敬し本願念仏の信心をおこすよう勧められます。
②仏説阿弥陀経：浄土三部経の一つ。極楽浄土の莊嚴や阿弥陀如来・称名念仏の徳が述べられ、日常さまざまな仏事に用いられます。

葬儀式

一旦お仏壇を閉じ（本来、仏間や寺院は聞法道場という位置付けであるため）、遺影の上方にご本尊・六字名号を掲示し、祭壇に向き直って勤めます。導師によっては表白（仏事の意味）が述べられます。

①路念仏（じねんぶつ）：かつて自宅から火葬場に向かう際、葬列を組んで道中に唱えられました。

②導師入堂～焼香 *あればその後弔辞の拝受

③正信偈～会葬者焼香：通常の読み方（本願寺派・行譜）と少々異なる、古来の「舌々読み」という節を用いることがあります。

④短念仏

⑤添引（そえびき）念仏：葬場で唱えるお念仏で、独特の節です。

⑥和讃二首：男女それぞれ、ご往生に関しての七五調の歌です。

⑦回向（えこう）、導師退出

*このあと弔電披露や、お花入れ、会場によっては生前の映像、など続きますが、宗教上の儀礼ではなく、お別れの時間となります。